



TITLE:

序『カラム』の時代XI--マレー・イスラム世界の女性と近代

AUTHOR(S):

光成, 歩

CITATION:

光成, 歩. 序『カラム』の時代XI--マレー・イスラム世界の女性と近代. CIRAS discussion paper No.92: 『カラム』の時代XI--マレー・イスラム世界の女性と近代 2020, 92: 3-7

ISSUE DATE:

2020-03

URL:

https://doi.org/10.14989/CIRASDP_92_3

RIGHT:

© Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

序『カラム』の時代XI

マレー・イスラム世界の女性と近代

光成 歩

本論集は、1950年から1969年までシンガポールで発行された月刊誌『カラム』(*Qalam*)を主な資料とし、脱植民地化期のマレー・ムスリムの生活世界について考察するものである。多宗教・多民族により成り立ってきたマレー・イスラム世界において、国民国家の建設にともなう社会の諸領域の変化はムスリムの日常生活のなかで具体的にどのような形で生じたのか。そのなかで、一般のムスリムが自らの生活環境をどのように理解し、方向づけようとしていたか。本論集は、『カラム』読者の生活世界に焦点をあてることでこれらの問いに接近する。

1. 独立期社会の方向性を問うた雑誌『カラム』

『カラム』は、1950年7月から1969年10月にかけて発行されたジャウィ綴りのマレー語による月刊誌である。編集者のエドルス¹⁾はカリマンタン出身のアラブ人ムスリムで、1948年にカラム出版社(Qalam Press)を立ち上げ、小説などの商業出版を経て『カラム』の出版を始めた。『カラム』は、当時の定期刊行物の多くが短期間で停刊となるなか、20年間にわたってとぎれなく発行された異例の雑誌である。『カラム』の主な読者層はシンガポールを含むマラヤ在住者だった一方、タイ南部からボルネオ島を含むマレー・イスラム世界の周縁部にも読者がいた。

マレー語出版においてローマ字綴りが主流となるなかでジャウィ綴りを採用し続けた点も、他の定期刊行物と一線を画す『カラム』の大きな特徴である。『カラム』の発行当時、学校教育などを通じてムスリムだけでなく非ムスリムにもローマ字綴りによるマレー語が普及しつつあり、ローマ字綴りで出版することは読者層を拡大する機会となりえた。イスラム教育を通

じてのみ身につくジャウィ綴りを採用し続けることで、『カラム』はムスリムが抱える問題をムスリムのみによって議論する場となることをあえて選んだ[山本 2002]。

『カラム』は、現代世界が急速に変化するなか、マレー・イスラム世界のムスリムを「われわれ」と呼び、そういった変化にどう対応していくべきかを論じた。『カラム』創刊号では次のように述べている。

今日、私たちが暮らすマレー世界は、社会環境、思想環境、政治環境のいずれにおいても大きな変化に直面している。それらの変化が私たちにとって有意義であって生活を向上させるものとなるためにも、私たちは適切な指導者や指針を必要としている

[*Qalam* 1950.7/8; 山本 2016]。

『カラム』の発行が始まったのは東西対立が激化していた1950年である。『カラム』創刊号は、非イスラム圏の朝鮮半島の分断や戦闘について、歴史的経緯や戦闘の様子を地図や写真を用いて詳しく報じた。また、ベトナム戦争も報道写真をふんだんに盛り込んで取りあげた[坪井 2014]。1951年4月号のイラストには、各国のムスリムが東西対立下で大国に虎視眈々と狙われている描写が表れており、『カラム』が冷戦下の対立に危機感を抱いていたことが伺われる²⁾。

また、1950年代から1960年代は、インドネシアとマラヤにおいて、それぞれ民族主義勢力の主導による国民国家の建設が進んだ時期でもあった。『カラム』は、シンガポールを含むマラヤを「祖国」(*tanahair*)と言及し、マレー・イスラム世界の植民地がそれぞれ国家を建設することを前提としつつ、新生国家はイスラムを基盤とすべきだと訴えた。そのなかで、マラヤよりも早期に独立を達成したインドネシアの選挙や政治

1) サイド・アブドゥッラー・アブドゥル・ハミド・アル＝エドルス(Syed Abdullah bin Abdul Hamid al-Edrus、以下エドルス)。1911年にカリマンタンのバンジャルマシンでアラブ人ムスリムの両親のもとに生まれ、1930年にシンガポールにわたって出版・執筆活動を始めた。エドルスの伝記に[Talib 2002]がある。

2) [*Qalam* 1951.4; 山本 2016]。東西対立による政治的緊張だけでなく、大国間の競争からムスリムが取り残される不安、さらには、足元の社会に目を向けた際に若いマレー・ムスリムの間に見られる信仰離れの現象も『カラム』の通奏低音をなす危機意識だった[山本 2002]。

動向を参照しようとして多くの論考が掲載された³⁾。

『カラム』の長期連載記事のタイトルを挙げてみると、「社説」、「千一問」、「祖国情勢」、「女性の園」、「苦いコーヒー」、「月々徒然なるままに」、「我々はどこへ向おうとしているのか」、「マレー語」、「宗教とは導きなり」、「コーランの秘密」、「コーランはイスラム文化の中心」、「イスラム国家」、「ムスリム同胞団」、「イスラム文化」、「言葉の広場」、「女性の世界」、「哲学と文化」、「イスラムの呼び声」、「芽を摘む」などがある。宗教、政治、女性、哲学、言語、文化といった幅広いテーマ設定には、脱植民地化と国民国家建設という政治過程と社会の諸領域の変化とをつなぎ合わせてとらえ、独立によって社会が到達すべき方向性を判じようとする『カラム』の問題意識が示されている。連載の誌面では、実社会においてテーマに関連する出来事が起これば話題を変えて論評することも珍しくなく、実社会への関心に裏打ちされた執筆・編集方針を読み取ることができる。

2.『カラム』にみる人びとの生活世界の理解

『カラム』は創刊号から女性をテーマとする連載をもち、かつその他の論説コーナーでも女性の権利や家族規範に関わる論題をしばしば扱った⁴⁾。当時、女性は就学・就業・政治参加などにより公の場での活動領域を広げていた。また、これに伴い、幼年期での結婚や安易な離婚など、家族形成に関する社会慣習に批判が寄せられるようになっていた。議会では男女の賃金格差の改善や家族法改革が進められ、とくにムスリムの婚姻・離婚に関わる話題が日刊紙でも大きく取り上げられた。結婚・離婚をめぐる論争は、女性の活動の場が広がり、公の場での存在感が増すなかで、女性を社会にどう位置づけるかというムスリム社会全体にとっての課題に連なるものだった。

教室に居らぶ女子児童や大学を闊歩する女子学生、政治集会で男性の前を行進する女性たちなど、写真を多用した『カラム』誌面でも女性の存在感は発揮

された。そして、『カラム』においてもムスリムの婚姻・離婚の問題は社会のあり方に関わる関心事としてあつかわれた。その関心は複数の側面からなっていた。第一に、旧習からの女性の解放という側面、第二に、伝統を固守する宗教指導層への批判という側面、第三に、社会制度としてムスリムの婚姻・離婚規範を整えることによる宗教の社会における再定位という側面、そして第四に、近代化する社会における信仰を育む単位としての家族の再定位という側面である。

こうした関心を背景として、『カラム』はムスリム女性をめぐる論争、とりわけ婚姻・離婚の問題に対して、誌面を割いて議論の場を提供し続けた。例えば、家族法改革に際しては、法案全文をマレー語訳（およびジャウィ翻字）して掲載し、ムスリムが内容を踏まえて改革の内容を吟味することを促した。また、誌面がムフティによる異端宣告などの攻撃を受けた際には、その文面を全文掲載し、これにさらに反論することで応えた。このように、『カラム』の誌面は、社会に対する問題意識に照らした独自のメッセージだけでなく、多様な媒体からの引用と転載によって構成されており、読者は、『カラム』を通して多様な立場の意見が議論を戦わせる言論空間に参加することができた。

『カラム』の20年間という発行期間は、社会の長期的な課題に対するムスリム社会の対応とその経過の把握を可能にしてきた⁵⁾。本論集は、本年度10年目となる『カラム』共同研究のこれまでの成果を踏まえ、『カラム』の誌面を、『カラム』のメッセージを受け取り、変化する社会情勢のなかで指針を模索してきた『カラム』読者の世界ととらえる視座から分析するものである。読者の世界は生活の世界である。『カラム』で論じられてきた、宗教、政治、思想、教育、市場、女性、家族の各テーマが、日常生活においてどのように生起し体験されたのかを本論集を通して明らかにする。また、このなかで、多宗教・多民族により成り立つ混成的な社会のありようがどのようにあつかわれてきたかにも着目する。

本論集では、『カラム』を軸に、1950～1960年代の

3) 例えば、1955年に行われたインドネシア総選挙に言及した記事の分析に[山本 2010b]がある。『カラム』執筆陣については[山本 2002]を参照。執筆陣もマラヤだけでなくインドネシアの改革派知識人を含み、誌面は国境を超えた知的交流を担った。インドネシアとマラヤの政治情勢や相互参照については[坪井・山本 2017; 坪井・山本 2018]の各論文を参照。

4) 創刊号からの連載「女の園」では、エドルスが女性の筆名でイスラムの婚姻や家族制度における女性の権利を論じた[光成 2019]。

5) 本論集のもととなった共同研究の成果として発行された2010年以降の論文集『カラムの時代』十編を参照。マレー・イスラム世界の「近代」[山本 2010]、公共領域の再編[坪井・山本 2011]、イスラム的社会制度の設計[坪井・山本 2012]、言論空間の形成[坪井・山本 2013]などをサブテーマとして分析を行ってきた。マレー・ムスリムの日常生活に焦点をあてたものに[坪井・山本 2014; 坪井・山本 2015; 坪井・山本 2016; 坪井・山本 2019]がある。また、インドネシアとマラヤの越境するネットワークに焦点をあてたものについては注3を参照。

社会変動のなかで、マレー・ムスリムが自らの生活世界をどのように理解していたかを検討する。そのため、ムスリムが自らのおかれた環境やその変化を主体的に位置づけ論じた場として、『カラム』のなかでも読者の投稿によって成り立っていたコラム「千一問」を取り上げる。また、マレー語文芸空間の特徴を明らかにし、『カラム』が読まれた世界として位置づける。その上で、資料編として「千一問」の日本語試訳を付す。本論集では、過去4編の『カラム』論文集からの続編として、第86号(1957年9月号)～第106号(1959年5月号)の「千一問」試訳を掲載する。

なお、本論集のもととなった『カラム』プロジェクトの概要については、過去の『カラム』共同研究の論文集序論を参照されたい⁶⁾。

3. コラム「千一問」から読み解くイスラム社会

『カラム』には、読者の投稿によって構成された誌面がいくつかあった。ひとつは、ムスリム同胞団の団員名簿および各地のムスリム同胞団員の活動報告である[山本 2003; 山本 2011]。もうひとつは、ムスリム同胞団員に限らない一般読者からの質問を募り、知識人が回答するという形式のコラム「千一問」で、『カラム』創刊号で質問の募集を始めてから停刊まで掲載が続いた。連載記事のなかでも、創刊から停刊まで掲載が続いたのは、「千一問」のほかにエドルスが筆名で書いた「苦いコーヒー」⁷⁾という論説コーナーだけであり、コラムが読者の支持を得ていたことが推察される。

「千一問」は、日常の宗教実践や社会生活のなかでムスリムが直面した疑問や課題についての生の声を採録した誌面であり、1950～1960年代のムスリム社会の状況や、それに対するムスリムの主体的な問題意識を明らかにする上で豊富な情報を含む。しかし、掲載期間が長く情報量が大きいこと、扱われるトピックが幅広い領域にわたっており概観しづらいこと、掲載期間中に問答の形式が変遷しておりデータの切り分けや整理が困難であることなどにより、「千一問」の全体像を俯瞰する分析は行われていない⁸⁾。本論集では、データの整理統合や基礎的な分類方法の検討などに

より、「千一問」分析の先鞭をつけるとともに、全体を俯瞰したデータを示し、「千一問」の資料としての意義を提示する。

本論集に採録する6本の内容と位置づけについて、以下で簡単に説明する。

山本は、「千一問」の質問者について分析し、ムスリム同胞団の団員名簿とも比較しながら質問者の特徴をまとめた。ムスリム同胞団が、当初は掲載していた女性の氏名や住所を掲載しなくなり、『カラム』の読者コミュニティにおける女性読者の存在が見えづらくなっていたのに対して、「千一問」には、筆名および実名による女性名での質問が掲載されていた。ここから、『カラム』の女性読者が男性読者と同様に、変化する社会での対応に悩み、またそうした関心を共有する輪に積極的に参加していたことが明らかになった。

光成は、「千一問」に表れる当時のムスリム社会の知的関心の広がりを一覧のもとに把握する目的で、図書館分類表を用いて質問群を整理した。1950～1960年代のマレー・ムスリムの社会は、商品経済との関わりや女性の地位改善論、さらにはマスメディアの広がりなど、近代特有の現象を体験しており、こうしたトピックを整理するにあたり、近代的な学知にもとづく図書館分類表による分類はある程度有効であることが明らかになった。他方で、異教徒や他民族・他宗派のムスリムらが持ちこむ思想や習慣への対応など、社会の混成的な成り立ちに由来する諸問題は、分類項目を横断する形で点在することとなった。

イスラム行政の諸分野に関しても、国民国家の建設期にあたる「カラムの時代」にはムスリム読者の間で議論が繰り返されていた。「千一問」にはそのような試行錯誤も表れている。足立は、「千一問」のうちザカートに関する30件の問答を抽出し、背景にある問題意識の変遷を分析した。「カラムの時代」のザカートの実践については、資料上の制約により明らかになっていることが乏しいなか、「千一問」の質問には、様々な解釈が混在する様子が示されており、ザカートを信徒の義務と意識しながらも、誰にどのように支払うべきかを読者らが試行錯誤していたことが明らかになった。

「千一問」を直接分析していない論文でも、ムスリム読者が身をおいた生活世界の成り立ちや課題が明らかにされた。坪井によれば、『カラム』では、ムスリムが目指すべき社会のあり方を論じるなかで、社会の混成性が否応なく意識されていた。坪井は、『カラム』誌上のイスラム国家に関する論説に焦点をあて、脱植民

6) 例えば[山本 2010a; 坪井 2019]など。

7) チュムティ・アルファルーク(Cemeti Al-Farouk)の筆名で、社会の出来事に苦言を寄せた。

8) 『カラム』第1号から第25号に掲載された「千一問」についての分析は[坪井・山本 2016]を参照。ほかハラルとハラムに焦点を絞った[金子 2015]がある。

地化をむかえていたマレー・イスラム世界のイスラム国家構想の特徴を検討した。展開された政治理論は、中東の近代イスラム思想を参照し、西洋近代的な国家を前提にイスラムの歴史的な政治制度を近代に位置づけるものだった。非ムスリムを含む国民統合という課題のもと、国民国家かイスラム国家かという論争に対し、『カラム』はイスラム政治理論において非ムスリムが寛容に遇されてきたことをズインミ概念を用いて強調した。

マレー語出版が盛んになった1920年代から1930年代は、「カラムの時代」を準備した時代である。マレー語文芸空間の形成期と言えるこの時期、文芸空間は多言語・多文化・多ジャンルの作品によって満たされ、実社会も植民地支配下の人の移動を通して混成性を増していった。西は、マレーシアの国民的作家アブドゥッラー・フサインの少年時代に焦点をあて、1920年代から1930年代のマレー語文芸空間の成り立ちを明らかにした。アブドゥッラーは、在地のマレー語・英語出版物、インドネシアや欧米からの輸入作品、伝承や演劇など多様な作品に触れ、やがて、投稿や文通により誌面を通じてつくられる世界に参加していった。

篠崎は、華語文芸世界で育った華人知識人に焦点をあて、文芸空間の混成性が第二次世界大戦を挟んでどのように展開したかを明らかにした。民族的・宗教的に混成的な環境で育ったこれらの華人知識人のなかからは、華語文芸世界に身を置きながらマレー語も習得し、マレー語で論説や小説を発表したり、マレー語雑誌を創刊したりする者が出ただけでなく、ジャウィ綴りのマレー語を習得した者も少なからず現れた。こうした華人知識人らは、1950～1960年代にマレー語を国語として国家建設が進んだ際に、華人社会で起こったマレー語学習ブームの支え手となった。

4. カラムの時代に見るムスリムの連帯と混成

本論集は、「千一問」に含まれる情報を俯瞰して分析する最初の試みとなった。大量のデータを、一定の知の枠組みに位置づけたり、特定のトピックで切り分けたりする作業がひとまず成立したという段階ではあるが、生活者の視点からなされる質問群の全体を眺めることで、1950～1960年代のマレー・イスラム世界において、ムスリムらが変動する社会に自らと周囲の生活世界でのできごとを位置づけようと切実な思いで投稿していたことが明らかになった。

新しく身の回りに出回った技術を生活にどのような取り入れるか、あるいは新しく流通するイスラム思想のもとでこれまで通りの生活を送ってよいのか、社会のあるべき方向をめぐってムスリムどうしの論争が戦わされる状況で、何に指針を求めるべきか等々、質問のなかに表れるムスリムたちは、刷新される世界との距離感を模索し考え続けていた（山本論文、足立論文）。「千一問」は、問いに対する答えが与えられる場であるだけでなく、そのように思案する見知らぬムスリムの存在を誌面を通して感じとれる場、すなわち読者コミュニティを実感できる場だった（山本論文）。「千一問」が『カラム』発行期間を通じて続いたことは、編集者の側でもその役割が正しく認識されていたことを示している。

また、既存の知の枠組みにうまく位置づけられない事象、すなわち、異教徒、アラブ人ムスリム、インド人ムスリム、改宗者、宗教間の結婚や養子縁組など、マレー・ムスリムにとっての多層的な他者との関係に関する質問が無視できない程度の大きな群れを形成したことは、マレー・イスラム世界の成り立ちの特徴でもある社会の混成性が、上述した社会の近代的な変化に対応しようとするムスリムの日常課題として立ち現れていたことを示していて興味深い（光成論文）。

『カラム』が発行された1950年代から1960年代を過ぎ、1970年代にはマレー・イスラム世界はそれぞれの国民国家体制のもとで開発の時代を迎える。社会の成り立ちは変わらないが、それを秩序づける言語や制度が整えられ、民族や宗教の境界に位置する人々は、所属を確定することではじめて社会に位置づけられるようになる。越境的な背景をもつ人々をそのこと自体によって位置づけようとする意識が一定の規模で存在し表明され続けたことは、「カラムの時代」の特性だったと言ってよい。このことは、マレー語文芸世界の混成的な成り立ち（西論文、篠崎論文）や、イスラム国家構想のなかに逆照射された非ムスリムの存在感（坪井論文）とも符合する。

参考文献

(1) 雑誌

Qalam. Singapore/Selangor.

(2) 論文・文献

Talib Samat. 2002. *Ahmad Lutfi: Penulis, Penerbit dan Pendakwah*. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.

金子奈央 2015 「読者の日常生活におけるハラル」
坪井祐司・山本博之編著『カラムの時代Ⅵ——近代マレー・ムスリムの日常生活 2』(CIAS Discussion Paper No. 53)、京都大学地域研究統合情報センター、pp. 32-36。

坪井祐司 2014 「カラムが切り取った世界：写真が語る東南アジアムスリムの世界観」坪井祐司・山本博之編著『カラムの時代Ⅴ——近代マレー・ムスリムの日常生活』(CIAS Discussion Paper No. 40)、京都大学地域研究統合情報センター、pp. 9-18。

坪井祐司 2019 「序『カラム』の時代——マレー・イスラム世界における自然と社会」坪井祐司・山本博之編著『カラムの時代Ⅹ——マレー・イスラム世界における自然と社会』(CIAS Discussion Paper No. 83)、京都大学東南アジア地域研究研究所、pp. 3-7。

坪井祐司・山本博之編著 2011 『カラムの時代Ⅱ——マレー・イスラム世界における公共領域の再編』(CIAS Discussion Paper No. 19)、京都大学地域研究統合情報センター。

坪井祐司・山本博之編著 2012 『カラムの時代Ⅲ——マレー・イスラム世界におけるイスラム的社会制度の設計』(CIAS Discussion Paper No. 23)、京都大学地域研究統合情報センター。

坪井祐司・山本博之編著 2013 『カラムの時代Ⅳ——マレー・ムスリムによる言論空間の形成』(CIAS Discussion Paper No. 32)、京都大学地域研究統合情報センター。

坪井祐司・山本博之編著 2014 『カラムの時代Ⅴ——近代マレー・ムスリムの日常生活』(CIAS Discussion Paper No. 40)、京都大学地域研究統合情報センター。

坪井祐司・山本博之編著 2015 『カラムの時代Ⅵ——近代マレー・ムスリムの日常生活 2』(CIAS Discussion Paper No. 53)、京都大学地域研究統合情報センター。

坪井祐司・山本博之編著 2016 『カラムの時代Ⅶ——コラム「千一問」にみるマレー・ムスリムの宗教実践』(CIAS Discussion Paper No. 62)、京都大学地域研究統合情報センター。

坪井祐司・山本博之編著 2017 『カラムの時代Ⅷ——マレー・ムスリムの越境するネットワーク』(CIAS Discussion Paper No. 68)、京都大学東南アジア地域研究研究所。

坪井祐司・山本博之編著 2018 『カラムの時代Ⅸ——マレー・ムスリムの越境するネットワーク 2』(CIAS Discussion Paper No. 78)、京都大学東南アジア地域研究研究所。

坪井祐司・山本博之編著 2019 『カラムの時代Ⅹ——マレー・イスラム世界における自然と社会』(CIAS Discussion Paper No. 83)、京都大学東南アジア地域研究研究所。

光成歩 2019 「『カラム』が論じた女性の権利と自由——コラム『女の園』より」坪井祐司・山本博之編著『カラムの時代Ⅹ——マレー・イスラム世界における自然と社会』(CIAS Discussion Paper No. 83)、京都大学東南アジア地域研究研究所、pp. 15-20。

山本博之 2002 「資料紹介『カラム』」「上智アジア学」第20号、pp. 259-343。

山本博之 2003 「東南アジアにおけるムスリム同胞団の成立とその初期の活動について」『ODYSSEUS』(東京大学大学院総合文化研究科)、第7号、pp. 59-73。

山本博之編 2010 『カラムの時代——マレー・イスラム世界の「近代」』CIAS Discussion Paper No. 13)、京都大学地域研究統合情報センター。

山本博之 2010a 「序『カラム』の時代——マレー・イスラム世界の「近代」、1950～1969年」山本博之編著『カラムの時代——マレー・イスラム世界の「近代」』CIAS Discussion Paper No. 13)、京都大学地域研究統合情報センター、pp. 4-9。

山本博之 2010b 「選挙と反乱——インドネシアの1955年総選挙の分析記事」山本博之編著『カラムの時代——マレー・イスラム世界の「近代」』(CIAS Discussion Paper No. 13)、京都大学地域研究統合情報センター、pp. 26-32。

山本博之 2011 「連載記事『ムスリム同胞よ、今こそ団結せよ！』」坪井祐司・山本博之編著『カラムの時代Ⅱ——マレー・イスラム世界における公共領域の再編』(CIAS Discussion Paper No. 19)、京都大学地域研究統合情報センター、pp. 25-31。

山本博之 2016 『雑誌から見る社会(情報とフィールド科学3)』京都大学学術出版会。